西野　徳之院長

利尻島国保中央病院

若い医師に地域医療の魅力を

継続されてこそ充実する医療

マニュアル作り後継者にバトン

医師不足に悩む過疎地が少なくない本道では、「地域医療」と言えば、一大決心をして取り組む、何か特別な医療のようなイメージが定着している。利尻島国保中央病院（四十八床）の西野徳之院長は、これを真っ向から否定した。

「地域医療に携わる医師をことさら英雄視しないで下さい」。取材に対して西野院長は何度も念を押した。地域医療は崇高なものでなければ義務でもない。それ自体が大きな魅力に満ちあふれているから取り組むのだという。

同病院は昭和六十年、利尻町と東利尻町（現在は財団法人・利尻富士町）による本道初の一部事務組合病院として開設。以来十年間、自治医大の卒業生が二年交代で勤務し、離島の医療を支えてきた。研修を積んだとはいえ、若手医師で構成する病院だけに、周囲も不安を抱かなかった訳ではない。地域住民の信頼を得るにはむろん時間を要した。

しかし、長期的な視点で徐々に体制を整えてきた歴代院長、スタッフの努力が実り、十年を期に実施した患者意識調査では、八割以上から「医師、看護婦ともに訴えをよく聞いてくれる」「よく説明してくれる」「説明がわかりやすい」と、うれしい回答を得た。地域医療に対する情熱を先輩から後輩に確実に継承した結果と言えるだろう。

「地域医療は継続されなければ意味がない。十年、二十年経っても、地域住民が健康で暮らせるような医療を提供し、サポートできなければ」と西野院長はいう。そのために必要とされるのが後継の医師の育成。若手医師に対して、地域医療の魅力を伝えることの大切さを強調する。

同病院の歴代勤務医は過去十年間、三十題以上もの原著論文、学会発表を手掛けてきた。ウニ刺傷、甲状腺疾患、救急搬送、輸血といった地域の特色や問題点を生かしたものから、サーファクタント、ATLなどの特殊な疾患までテーマは実に幅広い。地域医療を積極的に科学し、形として残す。すべてが、この地域でなければ得られなかったという貴重なものだけに説得力がある。

また、地元広報紙を通じた健康啓蒙活動などを契機に、この九月には地域住民の主導で仮称・草の根医療フォーラムが発足することになった。「必要に応じて勉強会、講演会を開催し、住民側も自ら医療を学び、そこから生まれた疑問や要望を行政、病院に訴えていく」（中川原潔代表）という。

住民と病院との距離をより近づけるのが狙い。双方の力を合わせ、地域医療を充実させようという意気込みにあふれている。こうした住民との密接な結び付きも、地域医療ならではの魅力といえるだろう。

六年六月に着任した西野院長もいよいよ九月末で退職することになった。現在は「これだけやれば大丈夫というぐらいのマニュアル」を手掛け、後任の小松英樹医長へのバトンタッチに控える。西野院長によれば、小松医長は既にいくつもの新しいプランを抱えているという。地域医療は継続されてこそ意味がある。

地域医療に携わるのは英雄だからでなく魅力あるから

盛夏お見舞い
株式会社　メディコ北海道
代表取締役社長
吉田　信
札幌市中央区大通西六丁目
北海道医師会館三階
☎(〇一一)二三二一八八七八

る医療機器・病院設備
MIZUHO
医療ーズへ"確かさ"をお約束します